

—物の見方、考え方—
経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

縁とは不思議なもので、菩提達磨画を書いて半世紀以上たってしまった。

菩提達磨が修業されたという中国にある嵩山少林寺より禅画芸術師の聘書と心鏡鑑をいただいた。

聘書には「您多年来致力于禅书法绘画的创作研究及禅文化的普及贡献巨大特授予嵩山少林寺禅画芸術師称号」とあり釈永信方丈（中国仏教協会副会長）のサインがあった。やっと達磨画も人並みになった。

日本の約11倍の人口を持つ中国も、食品の偽装をはじめ倫理観が希薄な国になってしまった。

特に1人子政策は叱る親がいなくなり、日本の少子化社会と同じで、自己中心的な考え方の子供が増加しており将来が心配されている。

中国も日本と同様に、倫理無き末法の時代となり、静かに仏教が発展してきている感がする。

そこで、今回は、仏教の根本的考え方の因縁生起、いわゆる因縁によって事象（物事）が縁起されることについて考えてみることにする。

仏教の根本思想は、一切の事物は固定的な実体をもたず、さまざまな原因（因）や条件（縁）が集まって成立していることが基本の考え方である。

したがって、何が原因で何が生起されるのかを学び知ることができれば、我々人間が社会生活をするうえでのあるべき姿が想像できる。有意義な人生を過ごす為には人間としてやるべき事象等について、以下探究することにする。

2. 風を読む仏教の教え

高度情報化社会の中で、最も重要なことは「変化を知り、変化を生かす」ことである。

もっと解りやすくいうと、風を読み、空気を読むことが経営者や管理者にとって重要なことである。

この場合の風とは、一般的な空気の流れや、気流ではなく、肌で感じるもの、形勢などであり、空気も同様に物理的な無色透明な気体ではなく、その場の気分や雰囲気さをさすということである。

最近の若者がよく使う空気を知らぬ経営者や管理者という表現であり、情報のなかで否定的情報を知らず読めない無能力者をいう言葉である。

仏教の教えでは、真言宗の開祖、空海の書「秘蔵記」にすばらしい教えがあるので述べることにする。

それは「水澄浄而照色相、然願風起波浪。波浪即作声。是説法之音」という教えである。

（これは水がきれい澄んでいる静かな状態では、色と形のあるものは、全てをそのままに照らしだすが、風によって波が立つと解らなくなる。しかし、静動へだたらず同じ水面であることを知ることが、悟りの境地である）ということを行っているのである。

だから、何時変化するか解らない水の表面と同様に人間の心の中も変化するので、同じ人間として相手を理解することが重要だと教えている。

これが「風を読む」という究極の管理者の持つべき資質の教えであり哲学である。

先の参議院の選挙の結果は、今更語ることも無い事象である。

世の中の「風の流れ」、「空気の流れ」を読めない人間が増えたということである。実に困ったことであり結果として、人間に起因するヒューマン・エラーの時代に突入する恐れが生じる。

最近、企業の間関係のトラブルに起因するヒューマン・エラーが続発しているが、昔は考えられなかったことだという見解もあわせ聞くことが多い。

これは、現在の高度情報化社会のなかで伝わらない情報、伝えられない情報があり、都合の悪い情報、いわゆる否定的情報の存在が無視されているのではないかと愚考する。

コミュニケーションとヒヤリングが如何に大切かということで、経営者、管理者と部下との意志の疎通があって「風が読め」、「空気が読め」ることにつながるということである。

空海の「秘蔵記」の教えを是非共、これからの経営者に生かしてもらいたいものである。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉